

## ●生理学会会員アンケート2012 結果報告

### 日本生理学会男女共同参画推進委員会

このアンケートは最初2010年に日本生理学会員を対象に、オンライン実施したが、回答率が低かった。そこで、2012年3月に第89回生理学会松本大会・会場でアンケート用紙を配布・回収し再実施した。目的は生理学分野における女性の割合・現状を明らかにし、将来の男女共同参画の理想的なあり方を模索するためである。このアンケートの解析結果の概要をここに報告する。なお、アンケート結果の全容はオンライン報告書としてグラフ(スライド形式およびポスター形式)とともに、日本生理学会ホームページに掲載した(下記①②③)。今後、学協会による大規模アンケートの結果が報告予定である。

松本大会アンケート回答者は551人、そのうち女性147人(27%)、男性382人(69%)、女性と男性の割合は1:2.5であった。前回のオンラインアンケート回答者は297人だったので、260人増えた。この時の生理学会員は2640人であったので、回答率21%である。

所属は女性98%、男性は全員が国内。医・獣・歯・薬・医療系所属が男女とも70%台で最多。身分は回答の多い順に、女性は助教20%>講師14%>教授13%。男性は教授36%>助教20%>講師14%。女性は助教が最多。男性は教授が最多。大学院生(修士+博士)は女17%>男10%と女性の割合は多いが、人数は24:37人と少ない。

任期付きポストは43>38%で女性に多い。任期1—2年が女32%>男23%、特に3年任期は大差があり女26%>男5%。再任有りは、女81%<男83%。一時的ポストは女27%>男17%。女性のほうが任期付きポストについている割合が多く、その任期は短い。

年齢は20—39歳は女47%>男34%。50—69歳

は女29%<男40%で、女性の方が若い人の割合が多い。

平成23年度の研究費の獲得状況は、100万円未満が女57%>男35%。~300万円は女23%<男28%。500万円以上は女20%<男37%。女性の方が獲得した研究費が少ない。

出身学部は、女性が理工農系38%>医23%>医療系14%>薬10%。男性は医44%>理工農系31%>医療系7%>薬=歯6%。出身大学院は、女性が医40%>理系22%>医療系9%。男性が医48%>理系26%>歯=薬5%。大学院進学せずは、女16%>男9%。博士号有りは、女68%<男83%。

家族状況は、単身が女55%>男20%。子供無しは、女62%>男30%。介護経験有りは、男=女19%。単身赴任は本人の経験有りが女24%<男31%。配偶者の単身赴任経験ありが女23%>男3%。女性は単身で、子供がいない割合が高い。

以上から、女性は男性と比べ、少人数で、身分が低く、任期付きポストが多く、任期は短く、研究費が少ない。大学院卒も少ない。この結果は、生理学分野の男女不平等を明らかに示している。ただ、若い女性の割合が増えていることから、未来に希望が感じられる。

しかし、この期待感は、自由回答を読むと、不安に変わる。自由回答は、内容から3分類し、それぞれにタイトルをつけた。<要望・希望・提言・理念><現状><嘆き>である。男女とも積極的に<要望・希望・提言・理念>を書いてくださった方が多い。しかし、<現状>では、女性が現在進行形の改善されつつある事柄をあげたのに対し、男性は男女共同参画の必要性すら認識していない人が少なくない。男女不平等の認識が、女性は高いのに対し、男性は低いことが明らかになっ

#### ①オンライン報告書：目次

1. 生理学会松本大会アンケート(2012年3月)結果の総括
2. 生理学会松本大会2012アンケート結果
3. 生理学会松本大会アンケートの自由回答のまとめ(男女別)
4. 生理学会オンラインアンケート(2010年1—7月)の自由回答のまとめ(男女混合)
5. 松本大会アンケート結果のグラフ(男女別)

#### ②オンライン男女別グラフ：スライド形式

#### ③オンライン男女別グラフ：ポスター形式

た。これでは、たとえ生理学分野に女性が増えても、男性の意識がこのままである限り、問題は解決しない。この男女間の認識の違いをどう解決すればよいのであろうか。検討する必要がある。

今回のアンケート結果を1999—2001年に生理学女性研究者の会（WPJ）が実施した女性会員を対象としたアンケート結果〔水村和枝，日本生理学雑誌63巻1号8頁，「生理学会女性会員の現状：アンケート調査から」（<http://square.umin.ac.jp/wpj/>）〕（以下に前回と記す）と較べた。前回の回答数149人は今回とほぼ同じである。前回、年齢は30—35歳が突出して多かったが、今回の集計に突出した年代はなかった。出身学部は、薬学部が

減り、かわりに理工農学部および看護学などの医療系学部が増えている。任期付ポストは前回16%だったが、今回43%と圧倒的に増えている。学生を除いた有職者中における教授（助教＋講師＋准教授）の比を計算すると、女性は、1999年22%：73%が、2012年17%：56%と減少していた。男性は、34%：66%が41%：46%となっていた。女性が少数なのを考えると、男性は地位が上がり、女性はむしろ下がっていると見ることができるのではないだろうか。特に女性准教授が17%から8%へ減少している。男女格差の問題は改善されていない。